莎草研究 No. 23: 7-12 (2021).
J. Jpn. Cyperol. (23): 7−12 (2021).

【産地報告】

鹿児島県新産のコアゼテンツキ（カヤツリグサ科）

矢野興一[1,*]・丸野勝敏[2]・藤井伸二[3]・田金秀一郎[2]
（[1]岡山理科大学生物地球学部 〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町 1-1;
[2]鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30;
[3]人間環境大学環境科学科 〒444-3505 愛知県岡崎市本宿町上三本松 6-2）

Okihito YANO[1,*], Katsutoshi MARUNO[2], Shinji FUJII[3] and Shuichiro TAGANE[2]: A new record of *Fimbristylis aestivalis* (Retz.) Vahl (Cyperaceae) from Kagoshima Prefecture, Japan

([1]Faculty of Biosphere-Geosphere Science, Okayama University of Science, Ridai-cho 1-1, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama 700-0005, JAPAN; [2]The Kagoshima University Museum, Kagoshima University, Korimoto 1-21-30, Kagoshima-shi, Kagoshima 890-0065, JAPAN; [3]Department of Environmental Science, University of Human Environments, Kamisanbonmatsu 6-2, Motojuku-cho, Okazaki-shi, Aichi 444-3505, JAPAN)
*Corresponding author: oki.yano@gmail.com

(2021 年 3 月 8 日　受理)

Abstract:
Fimbristylis aestivalis (Retz.) Vahl (Cyperaceae) is reported from Kagoshima Prefecture, Japan for the first time in the prefecture.

はじめに

コアゼテツキ *Fimbristylis aestivalis* (Retz.) Vahl（カヤツリグサ科）は、田の畦や湖沼の岸辺に生育する草丈 5–15 cm の一年生草本である。本種は日本、ロシア、台湾、中国、マレーシア、インドに分布しており、日本国内では本州に稀とされている（Hoshino et al. 2020）。しかしながら、谷城（2007）は本種の分布を本州と九州としている。九州においては、宮崎県（佐土原、新富、西都）、長崎県（長崎市）、佐賀県（佐賀市）からの記録があるものの（初島 2004, 蓑田 2018, 中西 2019）、九州でのコアゼテンツキの分布は極めて稀である。著者のひとり田金は、鹿児島県薩摩川内市で 2007 年に第二著者の丸野によって採集されたコアゼテンツキの標本が鹿児島大学総合研究博物館植物標本室（KAG）に収蔵されていることを発見した。さらに、著者のひとり藤井は 2019 年にトカラ列島の諏訪之瀬島で本種を採集した。鹿児島県ではこれまでにコアゼテツキの記録がないことから、これらは鹿児島県初記録と考えられるため、ここで報告する。

鹿児島県産コアゼテンツキ

今回確認した鹿児島県産のコアゼテンツキの標本は、2007 年 10 月 13 日に薩摩川内市の湖岸で採集された 1 点（K. Maruno s.n., KAG-088182）（図 1）と 2019 年 5 月 4 日にトカラ

列島の諏訪之瀬島の民宿の庭で採集された 1 点（S. Fujii no. 18241, KAG-152429）（図 2）であった。

植物体は叢生し、高さ 5–12 cm、葉は茎より短く、細い糸状で毛がある。茎の先端に複散房状の花序をつけ、多数の小穂をつける。小穂は狭楕円形で長さ 3–4 mm、茶褐色である（図 3A）。鱗片は膜質で卵形、長さ 1.0–1.5 mm、先端に短い芒をもち、中肋にはまばらに竜骨があり、竜骨部の外側には短毛を散生する（図 3A & B）。果実は広倒卵形で長さ 0.5–0.65 mm、表面は平滑である（図 3C）。花柱は扁平で、基部はやや膨れてまばらに短い毛があり、花柱上部と柱頭には長い毛が生じ、柱頭は 2 岐する（図 3C）。

薩摩川内市では当時、水位の下がった湖岸に生育しており、周囲にはカヤツリグサ科ベンケイヤワラスゲ *Carex benkei* Tak. Shimizu、ハリイ *Eleocharis congesta* D. Don var. *japonica* (Miq.) T. Koyama、クログワイ *E. kuroguwai* Ohwi、ヒメヒラテンツキ *F. autumnalis* (L.) Roem. et Schult.、ヒメホタルイ *Schoenoplectiella lineolata* (Franch. et Sav.) J. D. Jung et H. K. Choi、オオバコ科サワトウガラシ *Deinostema violaceum* (Maxim.) T. Yamaz.、ホシクサ科ホシクサ類 *Eriocaulon* spp. など、多数の湿生植物が生育していた。

諏訪之瀬島においては、コアゼテンツキは人家の庭の半裸地状芝生地に生育していた。芝地は約 5 m 四方の規模で、約 40%の被度で出穂前のイネ科植物（ニワホコリ？*Eragrostis* sp.）が優占していた。このイネ科植物群落の中に約 10 個体のコアゼテンツキの生育を確認した。著者のひとり藤井は近畿地方での晩秋期に干上がったダム湖の湖底でのコアゼテンツキの生育情報を得ているが、諏訪之瀬島の生育環境は薩摩川内市や近畿地方の水湿地環境とは異なる乾燥した環境であった。また、中西（2019）も長崎県と佐賀県において、本種は駐車場に使われるような空き地や駐車場の敷石の間などの人為的な立地に生育していることを報告している。したがって、本種の環境適応力はかなり大きいものと考えられる。

コアゼテンツキの分布については、本州（勝山・早坂 2015, Hoshino et al. 2020）、本州・九州（谷城 2007）とされ、四国（愛媛県）では 3 ヶ所からの記録があるが、現在は情報不足（愛媛県貴重野生動植物検討委員会 2003）とされており、文献によって分布情報が異なっている。これは、本種が小型の一年草のために生育が見過ごされてしまうことや、果実（花柱基部の毛の有無）と鱗片（芒の長さ）の形態を解剖して観察しないと正確な同定ができないため、近縁種のアゼテンツキ *F. squarrosa* Vahl やメアゼテンツキ *F. velata* R. Br. と混同されてしまうことがあるからと考えられる。

また、コアゼテンツキは、国内の多くの産地で絶滅が危惧されており（日本のレッドデータブック検索システムホームページ）、九州では宮崎県で「絶滅危惧 IA 類」（宮崎県版レッドデータブック改訂検討委員会 2011）、長崎市で「絶滅危惧 IA 類」（長崎市レッドリスト 2018 版; 長崎市環境部環境政策課ホームページ）とされている。

したがって、今回報告する鹿児島県産のコアゼテンツキは、国内や鹿児島県における分布とその保護・保全のための基礎データとして重要なものと考えられる。

図 1. 鹿児島県薩摩川内市から採集されたコアゼテンツキ（K. Maruno s.n., 13 Oct. 2007, KAG-088182）.

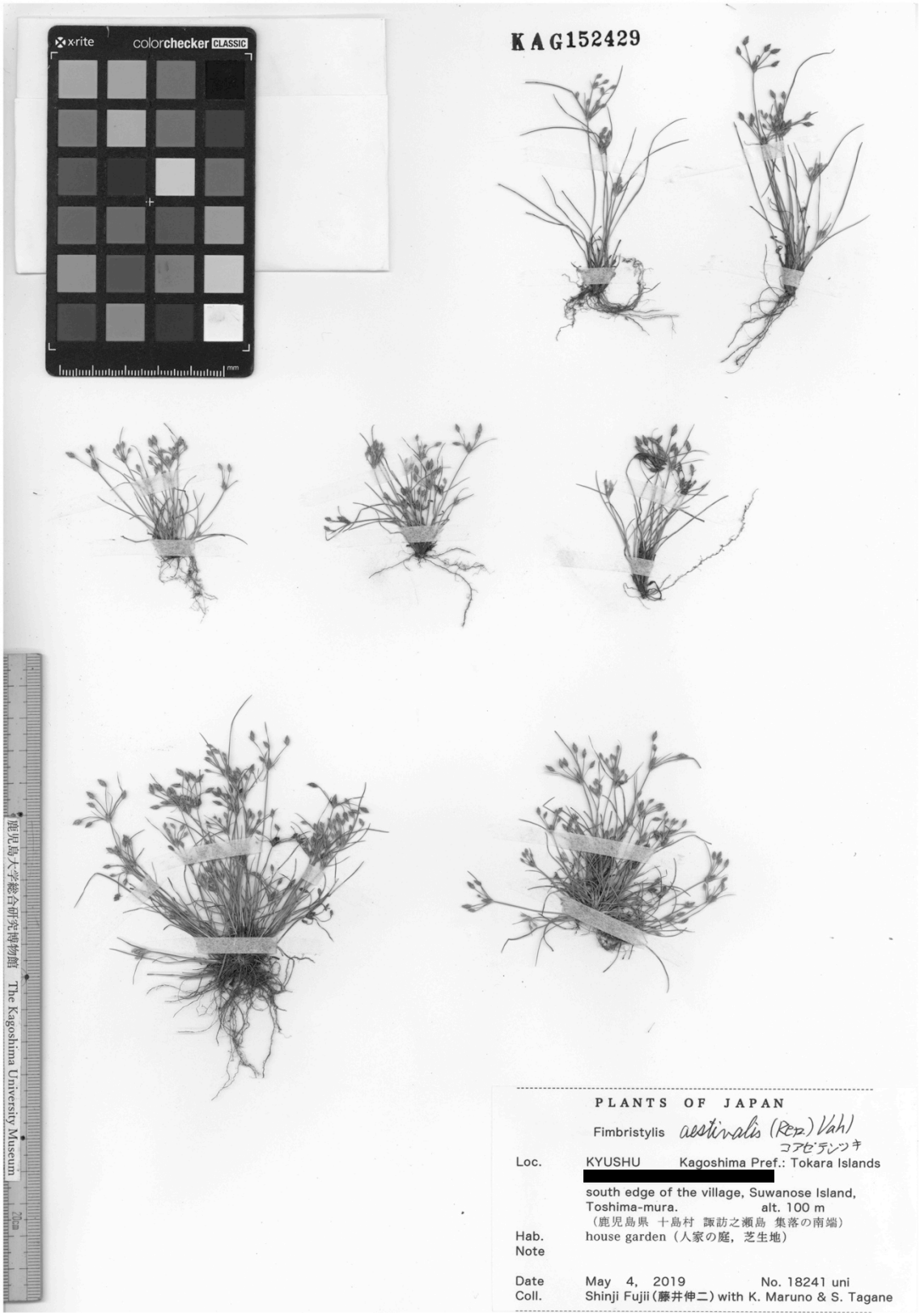

図 2. 鹿児島県トカラ列島諏訪之瀬島から採集されたコアゼテンツキ（S. Fujii no. 18241, 4 May 2019, KAG-152429）.

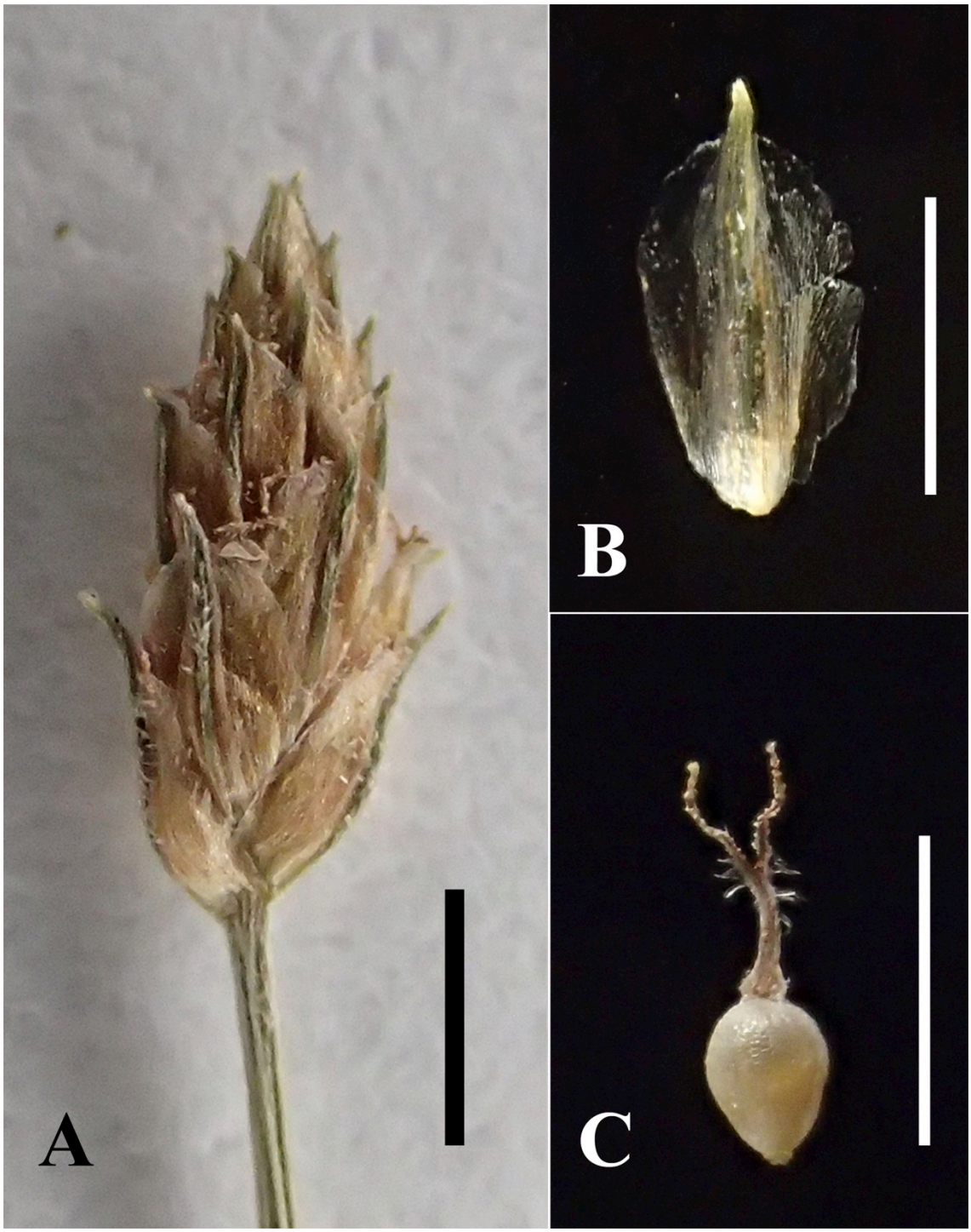

図 3. 鹿児島県薩摩川内市産コアゼテンツキ（K. Maruno s.n., KAG-088182）の花の拡大.
A: 小穂. **B:** 鱗片. **C:** 果実. スケールバーは 1 mm.

証拠標本

証拠標本は鹿児島大学総合研究博物館植物標本室（KAG）に収蔵されている。

鹿児島県. 薩摩川内市 (丸野勝敏 K. Maruno s.n., 13 Oct. 2007, KAG-088182). トカラ列島諏訪之瀬島, 100 m alt. (藤井伸二 S. Fujii no. 18241, 4 May 2019, KAG-152429).

謝辞

諏訪之瀬島の調査は環境省による第 5 次レッドリスト作成のための現地調査の一環として日本植物分類学会絶滅危惧植物専門第一委員会の事業として行われた。本研究の一部は環境研究総合推進費環境問題対応型研究「次世代 DNA バーコードによる絶滅危惧植物の種同定技術の開発と分類学的改訂」（4-2001, 矢原徹一代表）の一環として行われた。

参考文献

愛媛県貴重野生動植物検討委員会（編）2003. 愛媛県レッドデータブック Red Data Book, EHIME －愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物－. 愛媛県県民環境部環境局自然保護課, 松山.

初島住彦 2004. 九州植物目録. 鹿児島大学総合研究博物館研究報告 (1): 1–343. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.

Hoshino, T., Masaki, T., Katsuyama, T. and Horiuchi, H. 2020. *Fimbristylis*. *In*: Iwatsuki, K., Boufford, D. E. and Ohba, H. (eds.), Flora of Japan IVa, pp. 353–363. Kodansha, Tokyo.

勝山輝男・早坂英介 2015. カヤツリグサ科. *In:* 大橋広好・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩（編）, 改訂新版 日本の野生植物 1, pp. 294–362. 平凡社, 東京.

蓑田清隆 2018. コアゼテンツキを初確認. 長崎県植物研究会ニュースレター (2): 8−9.

宮崎県版レッドデータブック改訂検討委員会（編）2011. 改訂・宮崎県版レッドデータブック －宮崎県の保護上重要な野生生物 2010年版－. 宮崎県環境森林部自然環境課, 宮崎.

長崎市環境部環境政策課ホームページ. 長崎市レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）2018.
（https://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/170000/175000/p004017_d/fil/redlist3.pdf, 2021年2月19日閲覧）.

中西弘樹 2019. 新長崎県植物誌ノート（長崎県植物誌補遺）4. 長崎県生物学会誌 (84): 8−10.

日本のレッドデータ検索システムホームページ. NPO法人 野生動物調査協会, NPO法人 Envision環境保全事務所.
（http://jpnrdb.com/aboutsite.html, 2021年2月19日閲覧）.

谷城勝弘 2007. カヤツリグサ科入門図鑑. 247 pp. 全国農村教育協会, 東京.